

職業性ストレスにおける 家族機能とソーシャルサポートの関連

平川沙織¹⁾ 松本美奈子¹⁾ 境 泉洋²⁾

THE RELATIONSHIP BETWEEN OF FAMILY FUNCTION AND SOCIAL SUPPORT IN OCCUPATIONAL STRESS

Saori HIRAKAWA¹⁾ Minako MATSUMOTO¹⁾ Motohiro SAKAI²⁾

Abstract

Recently, the stress of workers keep rising. Social support is one of the coping strategies of stress, and it is shown that social support is related to family function in previous research. However, because an empirical research that examined the effect the social support on family function was not conducted, this research investigated the problem. As a result of a stepwise regression analysis, social support and family social support decreases psychological stress reaction. Moreover, as a result of classifying the family function, family social support in adaptive groups decreases the psychological stress in the adaptive groups.

KeyWords ; family function, occupational stress, social support

概要

近年、労働者のストレスは増加傾向にある。このようなストレス対策の一つとしてソーシャルサポートがあり、先行研究において、ソーシャルサポートは家族機能と関係があることが示されている。しかし、家族機能がソーシャルサポートに影響を与えていることを実証的に示した研究は行われていない。そのため、本研究においてはこの点について検討した。階層的重回帰分析の結果、ソーシャルサポート、そして家族によるソーシャルサポートがそれぞれ心理的ストレスを有意に低減させていることが示された。さらに、家族機能を適応群と不適応群に分類した結果、適応的な家族機能群の家族によるソーシャルサポートが心理的ストレスを有意に低減させていることが示された。

¹⁾ 大学大学院総合科学教育部

Graduate school of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

²⁾ 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

【問題と目的】

近年、労働者のストレスは増加傾向にある。2002年に実施された厚生労働省による労働者健康状況調査では、仕事や職業生活で「強い不安・悩み・ストレスを感じている労働者」の割合は61.5%であった。また、同省の労働者健康状況調査報告書（2003）によると、そのような労働者の割合は増加しつつあり、労働者の5人に3人は過剰なストレスを自覚していることが示されている。このような背景には、不景気によるリストラ、終身雇用制度の崩壊、労働者の働き方の多様化、経済効率の追求など様々な原因があり、そのようなストレスは今日職業性ストレスという言葉で表されている。職業性ストレスは、「個人が特定の職業に就き、また特定の職務を遂行する過程において、その職業や職務から必然的にもたらされる外的圧力（ストレッサー）、およびそのストレッサーにさらされることによって個人の側に生じる心理的・身体的・行動的反応（ストレス反応）」を表す複合的な概念であると定義される（Taylor, S.E., 2000）。

ソーシャルサポートとは、「家族や友人など、ある特定の個人を取り巻く様々な人々から与えられる有形・無形の支援のこと」と定義される（嶋, 1991）。ソーシャルサポートはストレス対処に効果があるとされているが、小牧（1996）の若年労働者に対するソーシャルサポートの効果研究において、職場における高いソーシャルサポートは、中程度の仕事量をこなす女子社員のモチベーションに影響を与えたという研究結果が示されていることや、また、浦（1989）の研究においても、いざという時に頼りになる周囲の人が多い家族においてはライフイベントが中程度以下である場合は、適応の程度を高く保つことができるという結果か

らも、ストレス反応に最も強い影響を与えている要因の一つがソーシャルサポートであることが明らかにされており、対人ストレスの多い職場におけるストレスに効果的であることが示唆される。

ソーシャルサポートは、上司や同僚による支援、友人による支援、家族による支援など多岐にわたる。職場におけるサポート研究は、上司や同僚によるサポート研究（小松, 2010；石田, 1999）が多く行われているが、職場のコミュニケーションが減少したことにより職場のメンタルヘルスが低減している（坂井, 2006）との報告もある。その中でも、椎（2006）の高齢者のソーシャルサポート選好における研究では、高齢者は自分の家族にサポートを求めたいという選好が強いことが示され、大久保（2005）の女子中学生におけるソーシャルサポート研究においても、家族サポートのみにストレス軽減効果が認められたという結果が示されていることから、家族によるソーシャルサポートの有無がストレス反応の低減において重要と考えられている。

職業性ストレスに対し、ストレス対処のセルフケア（石川, 2008；浦川, 2008）、職場環境改善および健康教育（森本, 2006）、メンタルヘルスケア（池上, 2008；丹下, 2007；大塚, 2007）、コーピング（大西, 2003）など様々な観点から研究が行われているが、職業性ストレスに対処する効果的な方法の一つとしてソーシャルサポートが挙げられる。今日の社会情勢においては職場環境の悪化や職場の人間関係が希薄になったとの報告もあり（国民生活白書, 2007）、職場外のサポートが効果的であると考えられることから、家族によるソーシャルサポートの重要性が示唆される。また、下川（2008）は、家族とのコミュニケーション

がない子どもは家族によるサポートが得られない、と指摘しており、家族機能は家族によるソーシャルサポートを検討する上で重要な要因となる。これらの先行研究では、家族のソーシャルサポートに家族機能が影響を与えていることが示唆されているが、この点を実証的に検討した研究は行われていない。したがって、本研究ではこの点を検討する。

また、家族によるソーシャルサポートを検討する上で、ストレスを抱える人を受け止め、適切にサポートを提供することができるよう家族の能力が必要となる。そのような家族の機能は家族機能として検討がなされている。家族機能とは、家族成員間の相互作用や個々の役割行動に注目し、家族を一つのシステムとしてとらえる方法である。本研究で用いるオルソンらの円環モデルでは、家族は一方向のみの直線因果論的な関係ではなく、家族成員が相互に影響を及ぼしている因果論的な関係であるとして、家族の相互作用に重点を置いている。そして円環モデルにおいて、「きずな」と「かじとり」の二つの次元から家族機能の評価を行う。きずなとは家族の凝集性を示し、かじとりとは家族の適応性を示す。

これらのことを踏まえ、本研究では家族機能が家族によるソーシャルサポートを介してストレス反応に与える影響を検討することを目的とする。本研究の仮説は次の通りである。①家族機能は、ソーシャルサポートを介してストレス反応を低減させる。②家族機能は、家族によるソーシャルサポートを介してストレス反応を低減させる。

【方法】

1. 調査時期

2009年7月下旬～9月下旬に実施した。

2. 調査対象者

調査回答時点で就労している社会人 138名（男性 79名、女性 46名、不明 13名）に回答を求めた。平均年齢は 41.60 歳、 $SD=11.88$ であった。

3. 質問紙構成

①フェイスシート

家族構成や年齢、家族の同居の状態について回答を求めた。

②FACESKGI16

家族システム評価尺度（立木，1999）。家族機能を測定する尺度として用いた。項目数はきずな次元で 8 項目、かじとり次元で 8 項目の計 16 項目で、はいいいえの二件法により回答を求めた。得点が高いほど家族機能が適応的であることを示している。

オルソンの円環モデル（立木，1990）

ミネソタ大学のディビット・ハーマン・オルソン（David Herman Olson）は、家族研究・家族療法に関する包括的なレビューを行った。オルソンはそのモデルを実証的に調査するため、かじとり・きずなの二つの次元からなる家族システムの円環モデル（Circumplex model）を提唱し、自己報告式の質問紙 FACES が開発された。（Olson, Sprenkle & Porter, 1978）。その後、FACES は 50 項目からなる質問紙 FACES II（Olson, Bell, & Portner, 1978）、30 項目の改訂版 FACES II（Olson, Portner, & Bell, 1982）、20 項目の FACES III（Olson, Portner, & Lavee, 1988）と改訂が重ねられ、オルソンの円環モデルに基づく日本語版尺度 FACESKG が開発された（石川，1987；武

田, 1988 ; 池埜ら・立木, 1990 ; 武田・立木, 1991).

きずな-かじとりの概念

FACESKG-16 は、「きずな (Cohesion)」「かじとり (Adaptability) の 2 つの概念から構成されており、きずなは「バラバラ (Disengaged)」「サラリ (Separated)」「ピツタリ (Connected)」「ベツタリ (Enmeshed)」の 4 つのレベルに分けられる。かじとりも同様に「融通なし (Rigid)」「キッチリ (Structured)」「柔軟 (Flexible)」「てんやわんや (Chaotic)」の 4 つのレベルに分けられる。

1) きずな (Cohesion)

どれだけ家族の中で交流が多く、関わりが深く、心のつながりが強いかがであり、家族の成員が互いに対して持つ感情的統合と定義される (Olson & McCubbin, 1983)。一般的に両極端にある「バラバラ」、「ベツタリ」に該当すると家族の相互作用のバランスがうまくとれていないことを意味する (Olson, 1983)。

2) かじとり (Adaptability)

家族のシステムとして状況に応じて力関係、役割分担、関係の中の規則を変化させていく能力と定義される (Olson & McCubbin, 1983)。一般的に両極端にある「融通なし」、「てんやわんや」に該当する家族の中では相互作用のバランスを保つことは難しいということの意味する (Olson, 1983)。

③ 日本語版ソーシャルサポート尺度

Zimet GD らが開発したソーシャルサポート尺度 (Multidimensional Scale of Perceived Social Support) を岩佐ら (2007) が日本語版にしたものを使用した。本尺度は中高年者におけるソーシャルサポートの測定指標として有用であることが示されて

いる (岩佐ら, 2007)。友人によるサポート、家族によるソーシャルサポート、大切な人のソーシャルサポートの三因子で構成されている。項目数は 12 項目で、“全くそう思わない (0 点)” から“非常にそう思う (3 点)” の四件法により回答を求めた。得点が高いほどソーシャルサポートが高いことを意味する。本研究ではソーシャルサポートの全体得点と、家族によるソーシャルサポート因子を抜粋したものをを用いた。

④ 職業性ストレス簡易調査票

平成 7～11 年度労働省委託研究「作業関連疾患の予防に関する研究」のストレス測定グループにより作成されたものである (下光ら, 2005)。下位尺度のうちストレス因子、心理的ストレス反応因子、身体的ストレス反応因子を用いた。項目はストレス尺度 17 項目、ストレス 29 項目 (心理的ストレス反応 18 項目、身体的ストレス反応 11 項目) である。ストレス尺度は“違う (0 点)” から“そうだ (3 点)”, ストレス反応尺度は“ほとんどなかった (0 点)” から“ほとんどいつもあった (3 点)” の四件法により回答を求めた。

【結果】

1. 円環モデルによる家族機能分布

家族機能の分布をオルソンの円環モデルに沿って図示した (Fig.1)。横軸がきずな次元で、0 点「バラバラ」から 16 点「ベツタリ」、縦軸はかじとり次元で 0 点「てんやわんや」から 16 点「キッチリ」である。この円環モデルによって家族機能の適応度が示され、縦軸と横軸それぞれ 4 点の太枠で囲まれた領域の中に入る家族は適応的であるとされている。なお、プロットしたそれぞれの点の右横につけた斜体数字は、その座標に当てはまる人数である。また、数字の

ない点は、その座標に一人のみが属することを示している。この図から、きずな次元が右寄りの「ベッタリ」の方向に偏っており、やや全体的に家族機能が密着していることが示された。

2. 家族機能とソーシャルサポートの年代別相関

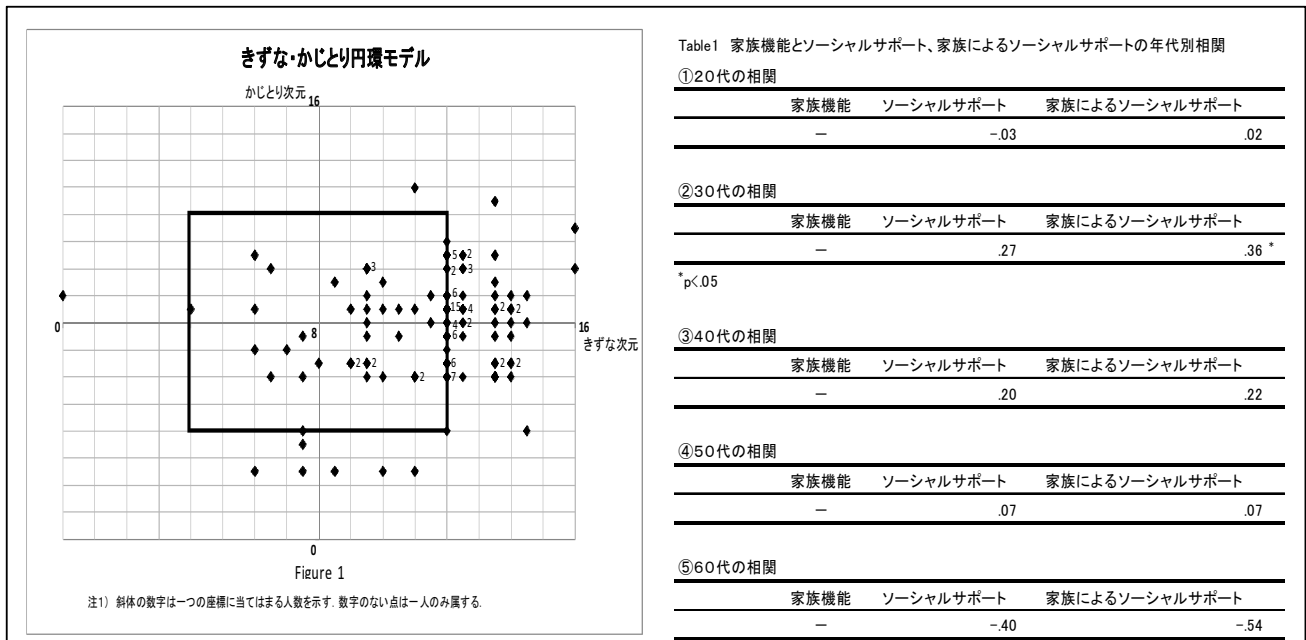
138名をそれぞれの年代ごとに分類した結果、20代は27名、30代は34名、40代は29名、50代は40名、60代は8名となった。家族機能とソーシャルサポートの相関を年代ごとに算出した（Table1）。その結果、20代において無相関（ $r=.02$ ）、60代において負の相関（ $r=-.54$ ）となり、他の年代とは異なる相関関係を示したため、その後の分析対象から除外し、残りの計103名を解析に用いた。平均年齢は44.27歳、 $SD=8.39$ であった。

3. 因子分析

ソーシャルサポート尺度（ $\alpha=.92$ ）、家族によるソーシャルサポート因子（ $\alpha=.92$ ）においては信頼性も高く、項目全体でのまとまりが認められた。職業性ストレス尺度では下位尺度はそれぞれ1因子構造であるが、ストレスと各ストレス反応において因子の内的整合性が低かったため、因子分析を行った。最尤法バリマックス回転による因子分析を用い、因子が二重負荷しているもの、及び因子負荷量が0.4以下の項目を削除した。

① スレッサーの因子分析

スレッサーの特徴を検出するために因子分析を行った。探索的因子分析を行ったところ、スクリープロットより二因子構造が妥当であると判断されたため因子数を二因子に指定し再度最尤法バリマックス回転による因子分析を行った。その結果二因子11項目が抽出された（Table2）。第I因子には5項目が含まれ、「4. かなり注意を集中する必要がある（.80）」や「3. 一生懸命働かなければならない（.73）」といった否定的な考えを示していることから「仕事に対する否



定的思考」とした(寄与率 18.60%, $\alpha=.77$). 第Ⅱ因子には 6 項目が含まれ, 「11. 自分の技能や知識を仕事で使うことが少ない(.55) や「13. 私の部署と他の部署とは馬が合わない(.42)」といった仕事ににくい環境を示していることから「希望にそぐわない環境」とした(寄与率 17.69%, $\alpha=.76$). なお, 項目 8, 10, 16, 9 は逆転項目として処理した.

②心理的ストレス反応の因子分析

心理的ストレス反応の特徴を検出するために因子分析を行った. 探索的因子分析を行ったところ, スクリーンプロットより二因子構造が妥当であると判断されたため因子数

を二因子に指定し再度最尤法バリマックス回転による因子分析を行った. その結果 11 項目二因子が抽出された (Table3). 第Ⅰ因子には 3 項目が含まれ, 「3. 生き生きする(.94)」, 「1. 活気がわいてくる(.93)」, といったポジティブな反応を示していることから, 「ポジティブ反応」とした(寄与率 40.52%, $\alpha=.92$). なお, ポジティブ反応は逆転項目である. 第Ⅱ因子には 8 項目が含まれ, 「5. 内心腹立たしい(.82)」や「12. 落ち着かない(.79)」といったネガティブな反応を示していることから「ネガティブ反応」とした(寄与率 23.96%, $\alpha=.88$).

Table2 ストレッサーの因子分析

| | I | II |
|-----------------------------------|-------|-------|
| 因子Ⅰ: 仕事に対する否定的思考 ($\alpha=.77$) | | |
| 4. かなり注意を集中する必要がある | .80 | |
| 3. 一生懸命働かなくてはならない | .73 | |
| 6. 勤務時間中はいつも仕事の事を考えていなければならない | .60 | |
| 5. 高度な知識や技術が必要な難しい仕事だ | .53 | |
| 2. 時間内に仕事が処理しきれない | .53 | |
| 因子Ⅱ: 希望にそぐわない環境 ($\alpha=.755$) | | |
| 10. 職場の仕事の方針に自分の意見を反映できる | | .72 |
| 9. 自分で仕事の順番・やり方を決めることができる | | .64 |
| 8. 自分のペースで仕事ができる | | .63 |
| 11. 自分の技能や知識を仕事で使うことが少ない | | .55 |
| 16. 仕事の内容は自分にあっている | | .49 |
| 13. 私の部署と他の部署とは馬が合わない | | .42 |
| 因子負荷量二乗和 | 2.42 | 2.30 |
| 寄与率 (%) | 18.60 | 17.69 |
| 累積寄与率 (%) | 18.6 | 36.30 |

Table3 心理的ストレス反応の因子分析

| | I | II |
|-------------------------------|-------|-------|
| 因子Ⅰ: ポジティブ反応 ($\alpha=.92$) | | |
| 3. 生き生きする | .94 | |
| 1. 活気がわいてくる | .93 | |
| 2. 元気がいっぱいだ | .92 | |
| 因子Ⅱ: ネガティブ反応 ($\alpha=.88$) | | |
| 5. 内心腹立たしい | | .82 |
| 12. 落ち着かない | | .79 |
| 13. ゆうつだ | | .79 |
| 10. 気がはりつめている | | .76 |
| 7. ひどく疲れた | | .76 |
| 6. イライラしている | | .75 |
| 4. 怒りを感じる | | .68 |
| 8. へとへとだ | | .60 |
| 因子負荷量二乗和 | 4.45 | 2.64 |
| 寄与率 (%) | 40.51 | 24.00 |
| 累積寄与率 (%) | 40.51 | 64.47 |

Table4 身体的ストレス反応の因子分析

| | I |
|---------------------------------|-------|
| 因子Ⅰ: 身体的ストレス反応 ($\alpha=.84$) | |
| 26. 胃腸の具合が悪い | .74 |
| 28. 便秘や下痢をする | .73 |
| 27. 食欲はない | .70 |
| 19. めまいがする | .65 |
| 29. よく眠れない | .60 |
| 21. 頭が重かったり頭痛がしたりする | .60 |
| 25. 動悸や息切れがする | .51 |
| 22. 首筋や肩がこる | .50 |
| 23. 腰が痛い | .46 |
| 24. 目が疲れる | .43 |
| 因子負荷量二乗和 | 3.81 |
| 寄与率 (%) | 31.75 |
| 累積寄与率 (%) | 31.75 |

③身体的ストレス反応の因子分析

身体的ストレス反応の特徴を検出するために、因子分析を行った。探索的因子分析を行ったところ、スクリープロットより三因子構造が妥当であると判断された。しかし、一因子目以外の因子内の項目数が1つもしくは2つであり、因子として妥当ではなかった。またクロンバック α を下げる項目であったため、因子数を一因子に指定し再度最尤法バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、1因子が抽出された (Table4)。因子分析の結果、「26. 胃腸の調子が悪い (.75)」「28. 便秘や下痢をする (.73)」といった10項目 (累積寄与率31.75%, $\alpha=.84$) が抽出された。

4. 因子間相関

各因子の相関係数を算出した。その結果、「ポジティブ反応」因子と「身体的ストレス反応」因子間で有意な正の相関 ($r=.20, p<.05$)、「ネガティブ反応」因子とソーシャルサポート間で有意な負の相関 ($r=-.36, p<.01$)、ソーシャルサポートと家族によるソーシャルサポート間で有意な正の相関 ($r=.83, p<.01$)、家族によるソーシャルサポートと家族機能間で有意な正の相

関 ($r=.22, p<.05$)、「家族機能×ソーシャルサポート」交互作用項と「家族機能×家族によるソーシャルサポート」交互作用項間で有意な正の相関 ($r=.55, p<.01$) が認められた (Table5)。

5. ネガティブな心理的ストレスに対する家族機能とソーシャルサポートの影響

家族機能とソーシャルサポートが心理的ストレス反応の「ネガティブ反応」に与える影響を検討するため、ネガティブ反応を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。まず、Step1ではストレスの2因子を、Step2では家族機能とソーシャルサポートを説明変数に加え、Step3では家族機能とソーシャルサポートの交互作用項が説明変数として投入された。なお、交互作用項は多重線形性の問題を考慮し、各変数を平均からの偏差を求めるセンタリング処置を行ってから投入した。その結果、Step2では $R^2=.11 (F(2,102)=4.92, p<.05)$ であり、Step1から $\Delta R^2=.09$ の有意な増加が認められた。また、ソーシャルサポート ($\beta=-.31, p<.01$) がネガティブなストレス反応を有意に低減させることが示された (Table6)。

Table5 因子間相関

| | 仕事に対する否定的思考 | 希望にそぐわない環境 | 身体的ストレス反応 | ポジティブ反応 | ネガティブ反応 | ソーシャルサポート | 家族によるソーシャルサポート | 家族機能 | 家族機能×ソーシャルサポート | 家族機能×家族によるソーシャルサポート |
|---------------------|-------------|------------|-----------|---------|---------|-----------|----------------|------|----------------|---------------------|
| 仕事に対する否定的思考 | - | .11 | .13 | .05 | -.11 | .09 | .09 | .07 | -.00 | -.08 |
| 希望にそぐわない環境 | | - | -.04 | -.13 | .06 | -.08 | .04 | .04 | -.13 | .05 |
| 身体的ストレス反応 | | | - | .25* | .10 | .04 | .09 | -.01 | .08 | .06 |
| ポジティブ反応 | | | | - | -.04 | .08 | .14 | .12 | .05 | -.09 |
| ネガティブ反応 | | | | | - | -.30* | -.36** | -.02 | .01 | -.02 |
| ソーシャルサポート | | | | | | - | .83* | .18 | .01 | -.07 |
| 家族によるソーシャルサポート | | | | | | | - | .22* | .07 | -.09 |
| 家族機能 | | | | | | | | - | .27** | -.10 |
| 家族機能×ソーシャルサポート | | | | | | | | | - | .55** |
| 家族機能×家族によるソーシャルサポート | | | | | | | | | | - |

* $p<.05$, ** $p<.01$

6. ネガティブな心理的ストレスに対する家族機能と家族によるソーシャルサポートの影響

家族機能と家族によるソーシャルサポートが心理的ストレス反応の「ネガティブ反応」に与える影響を検討するため、ネガティブ反応を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。まず、Step1ではストレスサーの2因子を、Step2では家族機能と家族によるソーシャルサポートを説明変数に加え、Step3では家族機能と家族によるソーシャルサポートの交互作用項が説明変数として投入された。なお、交互作用項は多重線形性の問題を考慮し、各変数を平均からの偏差を求めるセンタリング処置を行ってから投入された。その結果、Step2では $R^2=.15(F(2,102)=7.30, p<.01)$ であり、Step1から $\Delta R^2=.13$ の有意な増加が認められた。また、家族によるソーシャルサポート($\beta = -.37, p<.01$)がネガティブなストレス反応を有意に低減させることが示された

(Table7)。この解析の結果からは、家族機能は直接的に心理的ストレス反応を有意に低減させることは示唆されなかった。しかし、家族機能と家族によるソーシャルサポートの有意な相関が示されたため、後の解析において、高い家族機能を持つ人の家族によるソーシャルサポートが心理的ストレス反応に与える影響を検討した。

7. 適応的、不適応的家族機能群において家族によるソーシャルサポートがネガティブ反応に与える影響

オルソンの円環モデルにおける家族機能を適応・不適応に群分けすることにより、家族機能と家族によるソーシャルサポートがネガティブ反応に与える影響に差が出るかを検討した。まず、かじとりの視点で見ると、多くの人が適応的の範囲内であった。そのためきずな次元に注目し、ここではFig.1の太枠の内外で家族機能の高低を、適応的家族機能群(N=68, 平均年齢43.13歳)

| Table6 ネガティブ反応を従属変数とした階層的重回帰分析(ソーシャルサポート) | | | | Table7 ネガティブ反応を従属変数とした階層的重回帰分析(家族によるソーシャルサポート) | | | |
|---|-----------|-----------|-----------|--|-----------|-----------|-----------|
| | Step1 | Step2 | Step3 | | Step1 | Step2 | Step3 |
| | (強制投入法) | (強制投入法) | (強制投入法) | | (強制投入法) | (強制投入法) | (強制投入法) |
| | β | β | β | | β | β | β |
| 仕事に対する否定的認知 | -.12 n.s. | -.10 n.s. | -.10 n.s. | 仕事に対する否定的認知 | -.12 n.s. | -.10 n.s. | -.10 n.s. |
| 希望にそぐわない環境 | .08 n.s. | .09 n.s. | .10 n.s. | 希望にそぐわない環境 | .08 n.s. | .09 n.s. | .09 n.s. |
| ソーシャルサポート | | -.31 ** | -.31 ** | 家族によるソーシャルサポート | | -.37 ** | -.37 ** |
| 家族機能 | | .04 n.s. | .04 n.s. | 家族機能 | | .07 n.s. | .06 n.s. |
| ソーシャルサポート×家族機能 | | | .01 n.s. | 家族によるソーシャルサポート×家族機能 | | | -.06 n.s. |
| R^2 | .02 n.s. | .11 * | .11 n.s. | R^2 | .02 n.s. | .15 ** | .15 n.s. |
| ΔR^2 | .02 n.s. | .10 ** | .00 n.s. | ΔR^2 | .02 n.s. | .13 ** | .00 n.s. |
| *p<.05, **p<.01 | | | | **p<.01 | | | |

| Table8 家族機能適応群の階層的重回帰分析 | | | | Table9 家族機能不適応群の階層的重回帰分析 | | | |
|-------------------------|-----------|-----------|-----------|--------------------------|-----------|-----------|-----------|
| | Step1 | Step2 | Step3 | | Step1 | Step2 | Step3 |
| | (強制投入法) | (強制投入法) | (強制投入法) | | (強制投入法) | (強制投入法) | (強制投入法) |
| | β | β | β | | β | β | β |
| 仕事に対する否定的認知 | -.11 n.s. | -.09 n.s. | -.10 n.s. | 仕事に対する否定的認知 | -.20 n.s. | -.14 n.s. | -.13 n.s. |
| 希望にそぐわない環境 | .01 n.s. | .06 n.s. | .06 n.s. | 希望にそぐわない環境 | .24 n.s. | .16 n.s. | .16 n.s. |
| 家族によるソーシャルサポート | | .39 ** | .38 ** | 家族によるソーシャルサポート | | .32 n.s. | .47 n.s. |
| 家族機能(適応的) | | .05 n.s. | .05 n.s. | 家族機能(不適応的) | | -.11 n.s. | -.11 n.s. |
| 家族によるソーシャルサポート×家族機能 | | | -.01 n.s. | 家族によるソーシャルサポート×家族機能 | | | -.21 n.s. |
| R^2 | .01 n.s. | .17 * | .17 n.s. | R^2 | .07 n.s. | .17 n.s. | .19 n.s. |
| ΔR^2 | .01 n.s. | .16 ** | .00 n.s. | ΔR^2 | .07 n.s. | .10 n.s. | .02 n.s. |
| **p<.01, *p<.05 | | | | | | | |

と不適応的家族機能群 (N=35, 平均年齢 46.49 歳) とに分類した。ネガティブ反応に与える適応的家族機能群における家族機能と家族によるソーシャルサポートの影響を調べるため、ネガティブ反応を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。その結果、Step2 では $R^2=.17(F(2,67)=3.19, p<.05)$ であり、Step1 から $\Delta R^2=.16$ の有意な増加が認められた。また、家族によるソーシャルサポート ($\beta=.38, p<.01$) がネガティブ反応を有意に低減させていた (Table8)。しかし、同様の手法を用いて行った不適応的家族機能群の分析においては有意な値は認められなかった (Table9)。これらのことから、適応的な家族のソーシャルサポートは適応的でない家族のソーシャルサポートに比べ有意に心理的ストレス反応を低減させることが示唆された。

【考察】

1. 円環モデルによる家族機能分布

家族機能の分布から、きずな次元においては多くの対象者が適応的の範囲内であり、家族内での役割分担の明瞭さや家族内の力関係のバランスが取れていることが示唆された。また、家族の役割を状況に応じて変えることができることも示唆された。これらのことから、多くの対象者は大きな問題が生じた際にもその役割を柔軟に変化させることができると考えられる。

一方かじとり次元の得点は、適応の範囲から密着度の高い範囲まで広がっている。密着度の高い家族は、閉じた家族システムを持っており、家族成員がお互いに干渉しあいがちである。そのため、大きな問題が発生した場合にはそれを内包し、家族全員が問題に巻き込まれていく可能性もある。きずな次元が適応範囲外にある対象者につ

いては、家族構成やサポートの状態を個別に検討する必要がある。

2. 家族機能とソーシャルサポートの年代別相関

20 代と 60 代においては、他の年代に認められたような、家族機能とソーシャルサポート、家族によるソーシャルサポートの間の正の相関が認められなかった。その原因として、まず 20 代の家族構成をみると、今回の被験者は両親と一緒に暮らしている人と家庭を持っている人に分かれていた。そのため、同じ 20 代でも家族における役割の違いから、サポートの状態などが異なるために、このような結果になったと考えられる。60 代の場合は被験者の人数が少なかったことも原因の一つとして考えられるが、家族機能が不適応状態にある人が多かったことが理由として挙げられる。この点については、中高年のストレスに関する研究において、60 歳以上の高齢者は、家族との否定的な交流がストレスを増大させ抑うつを引き起こす (福川, 2002) といった、必ずしも家族がサポート源にはならないという問題が関連していると考えられる。また、有意だったのは 30 代の家族機能と家族によるソーシャルサポートの相関のみであったが、このことから、30 代は家族機能が高い人ほど家族によるソーシャルサポートが得られているといえる。

3. 因子分析

① ストレッサー尺度の因子分析

職業性ストレス簡易調査票においてストレッサー尺度はもともと 1 因子であったが、本研究では 2 因子が抽出された。例えば第 I 因子には「高度な知識や技術を使う難しい仕事である」といった項目も含み、第 II 因子の「自分の技能や知識を仕事で使うこ

とが少ない」といった項目は相反するものである。このことから、本研究においては、個人が仕事を否定的に考えることと、職場が働きにくい環境であると感じるということは、必ずしも一致していたわけではなく、別次元のストレス要因を構成していると考えられる。

②心理的ストレス反応の因子分析

心理的ストレス反応においても先行研究では1因子であったが、本研究では2因子が抽出された。理由としては、ポジティブ反応が増加するとネガティブ反応が減少するというような両者の関連がなく、個々に生じる反応であるため因子が分かれたと考えられる。

③身体的ストレス反応の因子分析

職業性ストレス簡易調査票において、身体的ストレス反応は1因子構造であった。そして本研究においても因子分析の結果、1因子が抽出された。しかし、因子分析により本研究では、職業性ストレス簡易調査票で用いられたデータと比べ、項目得点の分布に偏りがあることが示された。そのため、項目の中から身体的ストレス反応を構成するものとしてふさわしくない項目を削除した。これらのことから、職業性ストレス尺度で用いられたストレス反応の中には、本研究の多くの対象者に当てはまらない項目があったといえる。

4. 因子間相関

階層的重回帰分析で使用する因子間の関連を検討するために因子間相関を算出した。その結果、ネガティブ反応とソーシャルサポートとの相関、ネガティブ反応と家族によるソーシャルサポートとの相関が有意な値であった。これらのことから、ソーシャルサポートと心理的ストレス反応、特にネ

ガティブな反応とソーシャルサポートとの関連が強いことが示唆された。また、家族機能と家族によるソーシャルサポートの関連が強く、家族機能が高いと家族によるソーシャルサポートを多く得られていることが示唆された。先行研究(田甫, 2008; 小松, 2010)ではストレスとストレス反応の間に有意な正の相関が認められたが、本研究では有意ではなかった。その理由として、仕事にやりがいを感じていたり今の仕事に満足していたり、ストレスが高くてもストレス反応につながっていないためと考えられる。

5. 心理的ストレスに対する家族機能とソーシャルサポート、家族によるソーシャルサポートの効果

本研究の結果、ソーシャルサポート、家族によるソーシャルサポートがネガティブな心理的ストレス反応を減少させることが示された。ソーシャルサポートと家族機能、また家族によるソーシャルサポートと家族機能の変数を投入した際の決定係数が有意に上昇していたが、ソーシャルサポートの主効果のみ示された。

また、先行研究において、ソーシャルサポートにより緩衝されるストレスには一貫性がない(小松, 2010)が、ストレスの緩衝効果が生じるストレスとサポートの種類組み合わせは、性別、年齢などの対象者の属性により異なることが指摘されている(久田, 1987)。本研究では年代別の相関のみを取り、その後の解析から除外したが、年齢別や性別要因、職種要因など対象者の属性別の視点を加えることで、さらにソーシャルサポートの効果を検討する必要がある。

この解析の結果からは、家族成員のバラ

ンスや役割分担のような家族機能は直接的に心理的ストレス反応を低減させないことが示された。しかし、本研究において、家族機能が高いと家族によるソーシャルサポートを多く得られていることが示唆されたため、後の解析で家族機能が高い家族によるソーシャルサポートが心理的ストレス反応に与える影響を検討している。

6. 適応的、不適応的家族機能群の家族によるソーシャルサポートがネガティブ反応に与える効果

適応的な家族機能群において、ソーシャルサポートが有意に心理的ストレス反応を低減させる可能性が示唆された。この結果から、家族が適度な交流関係で成り立っており、家族間において適切なバランスが保たれている場合には家族からのサポートがストレス反応を低減させるが、家族のきずながバラバラでまとまりがない、もしくは家族成員が密着しすぎている場合には家族からのソーシャルサポートがストレス反応を低減させないことが示された。

7. 総合的考察

本研究の結果から、ソーシャルサポートは心理的反応の中でもネガティブな反応に影響を与えていることが示された。また、家族機能と家族によるソーシャルサポートの相関が有意であり、家族機能が高いと家族によるソーシャルサポートが多く得られることが示唆され、その後の解析においては適応的な家族機能群のソーシャルサポートがネガティブ反応に影響を与えていたことが示された。

職業性ストレスを抱える社会人が、他者あるいは家族からサポートを受けていると感じることで、心理的なストレスを低減させられることが示されれば、精神的健康を

維持することにもつながると考えられる。

また、職業上で起こる様々な問題は全て対人関係に帰するものであり、多くの人がストレスと隣り合わせであるといえる。そのような仕事上の問題や職業性ストレスへの対処法として、ソーシャルサポートが有効であると考えられ、ソーシャルサポートを効率よく提供するためには、適応的な家族機能を維持することが重要となる。本研究の結果においては離職経験や休職経験を調査しておらず、大きな問題が起こったか、もしくはその問題にどう対処したかなど、過去経験を問わなかった。しかし、家族というものは大きなライフイベントや問題などが生じ、家族のバランスが崩れたときに初めて意識されるものであることも考えられ、そのような場合に家族内での問題が発生し、家族ストレスを呈する場合も考えられる。そのため、今後は家族機能と家族内の問題との関わりの観点からも家族機能について検討していく必要がある。

引用文献

- 久田 満 1987 ソーシャルサポート研究の動向と今後の課題 看護研究 20, 170-179
- 池上和範, 田川宜昌, 真船浩介, 廣 尚典, 永田頌史 2008 積極的傾聴法を取り入れた管理監督者研修による効果 産業衛生学雑誌 50, 120-127
- 池埜 聡, 武田 丈, 倉石哲也, 大塚美和子, 石川久展, 立木茂雄 1990 オルソン円環モデルの理論的・実証的検討 - 構成概念妥当化パラダイムからのアプローチ - 関西学院大学社会学部紀要第 61 号, 83-122
- 石田光規 2007 誰にも頼れない人たち

- JGSS2003 から見る孤立者の背景 -
季刊家計経済研究 No.73, 71-79
- 石田浩二, 斉藤政彦 2008 産業現場におけるストレスに対するセルフケア - 産業医による取り組み実態のアンケート調査結果 - 産業衛生学雑誌 50, 4-10
- 岩佐 一, 権藤恭之, 増井幸恵, 稲垣宏樹, 河合千恵子, 大塚理加, 小川まどか, 高山 緑, 藺牟田洋美, 鈴木隆雄 2007 日本語版「ソーシャルサポート尺度」の信頼性ならびに妥当性 - 中高年者を対象とした検討 - 厚生学指標第54巻第6号, 26-33
- 権 泓珠 2006 中都市在住高齢者のソーシャルサポート選好 - その構造と高齢者の基本属性との関連 - 岡崎女子短期大学研究紀要 39, 1-10
- 小牧一裕, 田中國夫 1996 若年労働者に対するソーシャルサポートの効果 社会心理学研究第11巻第3号, 195-205
- 小松優紀, 甲斐裕子, 永松俊哉, 志和忠志, 須山靖男, 杉本正子 2010 職業性ストレスと抑うつとの関係における職場のソーシャルサポートの緩衝効果の検討 産業衛生学雑誌 52, 140-148
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 2002 労働者健康状況調査
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 2003 労働者健康状況調査
- 森本寛訓 2006 医療福祉分野における対人援助サービス従事者の精神的健康の現状と、その維持対策について - 職業性ストレス研究の枠組みから - 川崎医療福祉学会誌 Vol.16, 31-40
- 内閣府政策統括官 2007 国民生活白書
- 大久保純一郎 2005 中学生の精神的保健に関する実態調査研究(2) - ソーシャルサポートのストレス軽減効果について - 帝塚山大学心理福祉学部紀要 41-50
- 大西勝二 2003 職場で発生する対人葛藤時に使用する方略に関する研究 - 統制力と課題の重要性の及ぼす影響 - (2) 経営行動学大 17 巻第 2 号, 77-83
- 坂井一史 2007 産業領域におけるメンタルヘルス問題の現状と職場におけるソーシャルサポートの展望 東京大学大学院教育学研究科紀要 46 巻, 219-226
- 嶋 信弘 1991 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する研究 教育心理学研究第 39 巻 76
- 下川朋子, 室田洋子 2008 児童期における精神的回復力と家族コミュニケーションおよびソーシャルサポートとの関連(2) 教育心理学研究第 50 総会臨床 PD1-35
- 田甫久美子 2008 事業所における定期健康診断受診者の健康習慣実行度とストレス反応の因子構造 - 健康習慣指数と職業性ストレス反応の主成分分析を試みて - 金大医保つるま保健学雑誌 Vol.32(1), 77-83
- 丹下智香子, 横山和仁 2007 事業所におけるメンタルヘルス事例の実態とケアの実施状況 産業衛生学雑誌 49, 59-66
- Taylor, S.E., 2000 Female responses to stress; Tend and befriend, not fight or fight Psychological Review, Vol.107, No.3, 411-429
- 浦 光博, 南 隆男, 稲葉昭英 1989 ソーシャルサポート研究 - 研究の新しい流れと将来の展望 - 社会心理学研究 第 4 巻第 2 号, 78-90
- 浦川加代子, 萩 紀子 2008 勤労者のストレス対処行動と職業性ストレスとの関連 三重看護雑誌 Vol.10, 89-92

(受付日2010年9月30日, 受理日2010年10月12日)